

北のとびら

K i t a n o T o b i r a

特集
伝統
芸能

インタビュー

和太鼓奏者 金子竜太郎

ステージ

おたる市民能



93

平成24年9月

道内で活躍する
親しみやすさを感じさせながらも
新しい作風の作家をご紹介します。

アートギャラリー / 第二十四回「造形」

● 山本 祐歳

◊ 変容 ◊ を 創 り、 歩 む。

動物と人は重なる。彼ってあの動物みたい。この動物あの人っぽい。と感じる相互性を見つめていると、やがて私の目の前で両者は混じり合い、変容(メタモルフォーゼ)が始まる。

その面白みを形にし、背景を描いて写真に収めることで完成形としてきたが、あるとき作品を見た先輩作家に「僕はこの中に、入れない」と言われてしまった。作品が自ら完結しているから、見る人がイメージを膨らます余地を奪っているのかもしれない。はつとした。創る者は人の心に波を起こすことが大切だと思っているのに、これではいけない。その後、見る人にゆだねることを試み始めた。会場をひとつの空間作品とし、訪れる人がその中で自らイメージを編むことができるように。

一方で、近年「ピエタ」をライフワークに据えている。写真でミケランジェロの「ピエタ」を見てからだ。パチカン/サン・ピエトロ大聖堂にある端正なほうではなく、荒削りで未完成(遺作)のロンダニーニの「ピエタ」。その姿に、言い知れぬほどの心の脈動を覚えた。「嘆きの聖母子像」という宗教的な定義を凌駕して、そこには普遍的な哀

お知らせ

山本祐歳さんの作品を、財団事務局内の「アートスペース」で展示します。
会期 / 平成24年10月2日(火)~11月16日(金) ※平日9:00~17:00 詳細は当財団ホームページをご覧ください。



北海道文化財団では事業を通じ
多様な文化を未来へと紡いでいます。
今回は、伝統芸能にかかわる事業を
中心に取り上げ、ご紹介します。

表紙

「おたる市民能」で上演された半能「権弁慶」より

もくじ

- 02 アートギャラリー / 山本 祐歳
- 04 インタビュー / 金子竜太郎
- 06 Stage /
能を楽しもうプロジェクト2012
「おたる市民能」
- 08 共催事業レポート
 - 響かせよう!
エルフィンのみちから歎きの歌を
(北広島市)
 - 第5回北海道現代具象展
(札幌市・千歳市・深川市・網走市・室蘭市)
- 10 文化活動の基礎知識 / 森一生
学校演劇の足跡からみた舞台づくり
- 12 地域からのお便り
北海道音楽大行進の80年(旭川市)
- 13 アートの子カラ
子どものための劇場ができること
～福島支援人形劇公演～
- 14 この街この人 江差町



緑と地球環境保護のため、古紙100%の
再生紙と植物油インクを使用しています。



右ページ 架け橋1 / 2012

H460 × W330 × D200mm

上 太陽:sun [アンデルセン] / 2012

H500 × W930 × D120mm

下 月:moon [パール] / 2012

H720 × W350 × D150mm



山本 祐歳

Yamamoto Masatoshi

札幌市出身。大阪デザイナー学院卒業。東京の広告制作会社にグラフィック・デザイナー、アート・ディレクターとして勤務したのち帰郷し、平成9年から造形作家として本格的に活動を始める。

しみ、慈しみ、敬虔さ、そして希望が見えた。
暗闇に在ればこそ見えてくる、微かだが確かな光。それを感じてもらえるような私の「ピエタ」を創り続けていきたいと思っている。(山本)



「鼓童」に入る前は、バンドでドラムを担当していました。ドラムの皮はプラスチック製ですが、あるとき衝動的に動物の皮を叩きたくなり調べていくうちに、伝統的な和太鼓でコンテナボラーなことをやっている「鼓童」のステージに出会ったのです。

力むのをやめたとき
自分の音にたどり着いた

真剣に向き合ってくれる
北海道の人たち

ゆるみによる、音と体の
シンクロを体感してほしい

独自にあみだした、ゆるみ打法で、日本の伝統的楽器である和太鼓に新しい風を吹き込んだ金子竜太郎さん。世界を舞台に活躍し、ライブはもちろんワークショップにも定評のある金子さんに、和太鼓の魅力や、ゆるみについてお話を伺いました。

6大陸40カ国を回り演奏して感じるのは、国内外問わず、都市部より地方のほうが、演奏する側と観客との隔たりがないということです。幕が開いた瞬間につながついている「感覚とでもいうのでしょうか。生、ライブで本物のエンターテインメントに触れる機

今年11月に羽幌町でソロライブを行います。地元「おろろん太鼓」も出演するので、集団による勇壮な演奏と、ソロの柔らかい音色や繊細な表情との違いに注目してほしいです。また、太鼓の生音とは対極にあるコンピューターによる打ち込み音

金子竜太郎

太鼓は言葉や国を超えて理解し合える
コミュニケーションツール

Message for Hokkaido

北海道での文化活動に寄せて

何百年、何千年と続く人間の営みの中に祭と太鼓がありました。祭は出会いや折りの場であり、明日への活力です。それが現代のコンサートにつながるのではないのでしょうか。「文化の宅配便」が取り組んでいるのはまさに「祭の再生」なのだと思います。

北海道には豊かな自然があります。私も「鼓童」に入って佐渡島で研修を受けたとき、人が生きることや表現することと自然との密接な関わりを感じました。北海道で伝統芸能を残そうと活動している人も、今あるものを守るだけでなく、自然と触れ合い感じたことを自らの体を通して表現して欲しいです。きっとそれは、ほかにはない力強さや可能性を秘めていると思います。

文化の宅配便事業

道内の各地域において、芸術鑑賞など広く文化に接する機会を拡充するため、地域文化の拠点となる公立文化ホール等の施設がないなど、鑑賞環境が整備されていない市町村において、鑑賞公演とともにレクチャーやワークショップなどを組み合わせた事業です。

平成24年度
文化の宅配便開催事業



ユニット・リトルバレエ 「誰でもわかる 楽しいクラシック・バレエ」

平成24年10月14日(日)16:30~
斜里町立ウトロ小中学校(斜里町ウトロ)
「白鳥の湖」や「くるみ割り人形」の中から代表的な踊りの上演や、バレエの練習風景、歴史等についての解説を行います。公演前には衣装試着体験や衣装展示も行います。



金子竜太郎 「和太鼓コンサート」

平成24年11月3日(土)15:30~
羽幌町中央公民館(羽幌町)
和太鼓集団「鼓童」の中心的メンバーとして活躍し、平成19年に独立した和太鼓プレイヤー金子竜太郎によるソロコンサートです。



札幌室内歌劇場「唱歌の学校」

平成24年11月11日(日)14:00~
樺皮町中央公民館(樺皮町)
とある小学校のクラスを舞台に、一年間の季節の移り変わりや子どもたちの交流や成長を描きます。唱歌の歴史や童謡との違いなども解説します。



ウィンドアンサンブル・ポロゴ 「一緒に音楽を作ろう! ~木管五重奏の楽しみ」

平成24年11月14日(水)19:00~
京極町生涯学習センター-講堂(京極町)
作品についての解説を交えながら、さまざまな楽曲を演奏します。木管楽器の解説や、耳馴染みのある曲も盛り込んだ楽しい演奏会です。

従来の力強い奏法とは違う自分流の打法を模索する中、台湾での公演中に体を痛めてしまった私は、けがをきっかけに自分の心と体、内面と深く向き合うようになり、「ゆるみ打法」にたどり着きました。力まず叩くことで、力が太鼓に跳ね返されることなく皮や胴、反対側の皮、その向こうの空気へと音が染みわたり、遠くまで響く聞きやすい音が出るようになりました。私のワークショップでも、2時間ほどゆるみを練習しただけで音の質の変化を参加者の皆さんに感じてもらえます。

演奏するときは、性格の違う5種類の太鼓をドラムセットのように配置し、単にリズムを刻むのではなく、それぞれを調和させながらひとつのメロディを紡ぎ出すように演奏しています。特にチャップは、元々の音の出し方はシンプルな楽器ですが、私は楽器のデザインを改良し、独自に考案した方法で演奏しています。小さいながらもいろいろな音色が繰り出される面白さや、金属特有の澄んだ響きなど、太鼓とはまた違った魅力があります。

会が少ない分、お客様が比較的先入観なく観てくれるのかもしれない。北海道でも数年にわたって、「文化の宅配便」で和太鼓のソロライブとワークショップを行っています。皆さん、和太鼓はこうあるべきという固定観念にとらわれず、より新鮮に受け止めてくださる方が多いように感じます。中学生から「人生観が変わりました」とコメントをもらったり、「高齢の方からも「生きていて良かった」という感想をいただいたりしたこともあります。私も自分の中のピアノ部分を引き出してくれるような気がして、逆にエネルギーをもらえるので、地方で演奏するのは好きなんです。太鼓を叩くことが、聴く人にとつての新しい発見や元気づけにつながり、いつもの生活に何かプラスアルファできるものを持つて帰ってくれたらいいな、という思いで毎回ステージに臨んでいます。劇場などの施設がない地域で行う「文化の宅配便」は、大変意義のあることだと思っています。

和太鼓奏者

金子

金子竜太郎 (かねこ りゅうたろう)

昭和62年より「鼓童」の中心的プレイヤーとして20年間活動。独立後はソロパフォーマンス、セッション、ユニットという3つのスタイルで高い音楽性と柔軟な感性を表現している。脱力によって豊かな響きと多彩なリズムを追求する「ゆるみ打法」や、独自のデザインによるジャンパのオリジナル奏法など、他に類をみない演奏は国内外で高い評価を得ており、演奏技術はもとより、心身の探求に基づく奥深い世界を分かりやすく指導するワークショップ「ゆるんでたいて」にも定評がある。



取材協力(株)ワンエイトクリエイション

On Stage

共催事業から
伝統芸能に関する舞台を
ご紹介します。

能を楽しもうプロジェクト2012 おたる市民能

平成24年9月1日【土】会場／旧岡崎家能舞台・小樽市公会堂

小樽市民による、 市民のための、手づくり能楽公演。

小樽市民が参加する手づくりの能楽公演「おたる市民能」。前年度に引き続き第二回目が行われました。会場は、小樽市公会堂の敷地内にある旧岡崎家能舞台。大正15年、雑穀商として財をなした岡崎謙氏が自邸内に建てた能舞台です。

岡崎氏が他界後、小樽市に寄贈され昭和36年に現在地に移築されましたが、その際、裏方などが出入りする「切戸口」きりこまぐちを塞いだ上、専用の楽屋や客席を設けず、正式な能楽公演には充たされなくなっていました。そうした点を乗り越えて能舞台を有効活用していきたいと、「旧岡崎家能舞台を生かす会」が中心となり、3年前から始め、今回で4回目となる「能を楽しもうプロジェクト」。去年からは出演者を公募して「おたる市民能」を始めました。

前半は地元団体による仕舞や連吟から始まり、後半はプロの能楽師や狂言師と市民の共演による狂言「仁王」や半能「橋弁慶」などを上演。各演目の間には客席に「謡」うたいを体験してもらったりワークショップや、能装束の着付けを解説付きで紹介するコーナーを設けるなど、初心者でも楽しめる



※表紙写真は、当日上演された「橋弁慶」





※会場はいつでも旧岡崎家能舞台・小樽市公会堂

●小樽・能楽・歴史展

能の歴史や特徴のほか、小樽市内の能にまつわるスポットなどを、写真やパネルで展示して紹介。
(平成24年9月、11月開催予定)

●旧岡崎家能舞台saico; (さいこう)シンポジウム

能楽にまつわる市内各所をめぐるバスツアーを9月17日(祝)に実施。
参加者と意見交換をした上で、能舞台のあり方を考えるシンポジウムを11月に開催。

●能楽体感ゼミナール

団体向けの「体験型レクチャー」と、家紋の刷り込みや能舞台の紙模型といった「能楽ものづくり体験」など。



牛若丸を演じたのは「能楽こども教室」で謡や舞を学んだ8歳の女の子。1年近い稽古を経ての晴れ舞台です。



弁慶と牛若丸の京都五条橋での出会いを描いた「橋弁慶」。今回は曲の後半部分だけを演じる「半能」スタイルで演じられました。

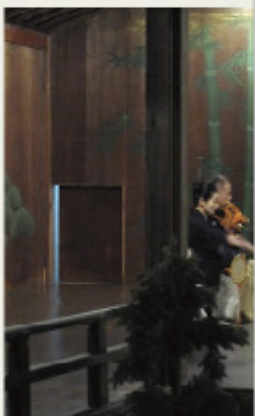


るよう趣向を凝らしました。公会堂の施設と仮設屋外席はぎつしりと埋まり、日差しが傾く17時半から始まった公演は幻想的な雰囲気。観客は、間に浮かびあがるような能舞台の厳かな空間に酔いしれるひとときを楽しみました。

「能を楽しもうプロジェクト」では、このほかにも「能楽体感ゼミナール」や展示など多彩な催しを実施。東北以北で貴重な能舞台がある小樽での、新たな試みが注目されます。

「能を楽しもうプロジェクト」では、北海道で唯一の歴史的能舞台である旧岡崎家能舞台を有効活用するとともに、能の魅力を広く普及する目的で多彩な催しを実施してきました。

今年、子ども向けの体験教室で能に親しんだ子どもたちが、役者や地謡として舞台上に登場したり、市民能に参加するため札幌や江別、蘭越などから稽古に通ってくれた方もいて、活動の広がりを実感しています。また、「切戸口」を51年ぶりに使えるようにし、舞台裏の楽屋や客席スタンドも仮設で設置。能舞台の本舞台や橋掛かりの床下が、足拍子を踏んだときに良い音が鳴るように調整したり、雑音を消すための吸音材を設置したりもしました。おかげで今回、移築後初めて本格的な形式に沿って公演が実現しました。いつか能楽の専門劇場として再建を果たし、市民はもちろん海外からの観光客にも楽しんでもらえるよう、今後も事業を継続していきたいと考えています。

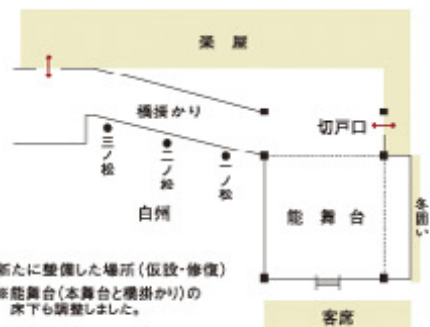


51年ぶりに修復された「切戸口」

旧岡崎家能舞台を生かす会 会長 三ツ江 匡弘

まちの文化創造事業 (シアタープログラム)

地域の皆さんが参加する自主的・創造的な音楽・演劇・舞踏等の舞台発表活動および普及活動(ワークショップ、レクチャーなど)を共催します。



新たに整備した場所(仮設・修復)
※能舞台(本舞台と橋掛かり)の床下も調整しました。



忙しい時間を縫って1年もの間、練習に励んだメンバー。緊張しつつも舞台上で歌う表情は晴れやかでした。



シアタープログラム

地域の皆さんが参加する自主的・創造的な音楽・演劇・舞踊等の舞台発表活動および普及活動（ワークショップ、レクチャーなど）を共催します。
●公募キャスト、スタッフによる市民参加の舞台公演など。●複数地域から参加する演劇祭、音楽祭など。

まちの文化創造事業・シアタープログラム



北広島市

我がまちの交響曲 第九 演奏会
響かせよう！

エルフィンのまちから「喜びの歌」を

平成23年11月、北広島音楽協会の結成20周年を記念して、ベートーヴェンの「交響曲第九番 二短調 作品125」の演奏会が開催されました。会場は、「花ホール」の愛称で親しまれている芸術文化ホール。600人の観客を前に、北海道交響楽団が旋律を奏で、4名のソリストと

182名からなる市民合唱団の歌声が、暮れゆく晩秋の午後、歓喜の歌を高くかに歌いあげました。北広島市の音楽文化発展を目的に誕生した北広島音楽協会は、20周年を迎えるにあたり、その2年前から記念事業の検討を始めました。平成22年5月には「20周年記念事業実行委員会準備会」を結成。会員に企画プランのアンケートを行い決定したのが、市民による合唱付きでの「第九」の全曲演奏でした。実行委員長として会員の意見をとりまとめたのは、市内で子ども合唱団を率いる岡元真理子さん。「当時、市内7つの合唱団を合わせるとメンバーは90人以上。これなら「第九」も歌えると確信しました」。さらに「第九」を歌いたい市民を募り、本番まで約1年となった平成22年10月に総勢140人の「我がまちの交響曲 第九合唱団」が結成されました。パートごとに指導者を迎え、総合合唱指導者には「第九」の指導経験が豊富な長内敷さんを迎えました。最終的に182人に増えたメンバーには「第九」合唱の未経験者も多く、「皆さん大変な努力をされたと思います。実行委員も一丸となつてさまざまなサポートを行いま

した」と岡元さん。男女それぞれのパート練習を週に2回、本番が近づくと回数を増やし、後半には総練習も加わりました。本番当日、「花ホール」の舞台袖には、小学校1年生から91歳まで幅広い世代のメンバーの緊張した表情がそろいました。通常、「第九」の合唱団は第1楽章と第2楽章の間に入場しますが、当日は第3楽章が始まる前に登壇。これは、子どもやお年寄りの団員を気遣う市民合唱団ならではの工夫でした。ステージでは、北海道交響楽団、ソリスト、市民合唱団が、川越守さんの指揮の下でひとつに。緊張も忘れる充実感の中で、「歓喜の歌」が響き、観客の皆さんとも体となったフィナーレを迎えました。拍手の中、舞台を降りた市民合唱団は、お互いに肩を叩きながら涙して成功を喜びました。「今後、北広島市の市制20周年などの節目に、この市民合唱団を再結成できたら…」と夢を描く岡元さん。すでに市民からは「次回は私も歌いたい」との声が上がっているそうです。今回得た手応えを礎に、次は、いつどんな歌声が、北広島市のまちに響くのでしょうか。



札幌市 / 千歳市
深川市 / 網走市
室蘭市

第5回 北海道現代具象展

北海道で活動する作家と、全国的に脚光を浴びる招待作家の具象絵画作品を集め、札幌から道内を巡回する「北海道現代具象展」。その第5回展が、平成23年11月〜同年3月に開催されました。作家たちが自ら企画し運営する

同展は、「作家が会派の枠を超えてひとつの展覧会を開催する」という全国的にも珍しい試み。実現が難しいですが、「作家が知り合いの作家に声をかけ、その知り合いを誘うかたちで成り立っています。意外とフレンドリーな感じで企画に乗ってもらうんです」と、実行委員・事務局を務める具象絵画作家の西田陽二さん。

同展の前身は、道内の若き具象絵画作家を世に出すための展示会。現在はその主旨と共に、参加する作家の研さんのために、毎年、全国的に注目される作家3名を招待しているとのこと。その狙いは道外作家との交流を通して、最先端の流れを北海道に呼び込み、大きな刺激にすることです。

第5回展では、富山を拠点にする安達博文さんや武蔵野美術大学教授で画家の遠藤彰子さん、日展画家の西房浩二さんを招いたほか、周年記念として北海道にゆかりのある笠井誠さん、野田弘志さんにも前年に引き続き出展を依頼。また、巡回展終了後の3月には、北海道立近代美術館でこれまでの招待作家17人と、実行委員を担った道内作家21人、合計38人による大規模な記念展を開催しました。そ

の見応えのある内容に多くの反響がありました。北海道という距離感があり、オープンな土地柄だからこそ実現できたと言えるかもしれません。

同展にかける作家たちの想いは、「二人でも多くの人に具象絵画を生で見てほしい」ということ。「具体的な対象物を描く絵画だからこそ、近くに寄って直に目にすることで強くりアリティが伝わる。さまざまな絵画の中でも、具象絵画は特に実物の鑑賞が心に残る体験になります。今を生きる作家が描く、生きた具象絵画」を多くのの人に見てもらいたい。

主催者側のそんな熱意を感じるからこそ、会派を超えて賛同者が集まり、無償出品を快諾するのかもしれない。「北海道でこんなすごい具象絵画展ができるのは、という驚きの声、東京や長崎、京都、奈良など道外から足を運んだ皆さんから聞かれました」と、西田さんは確かな手応えを振り返ります。

「次の区切りとなる第10回展に向け、また企画を考えます。さらなる北海道の具象絵画の発展につなげていきます」との言葉通り、今後とも目が離せません。

地域の皆さんが参加する自主的・創造的な、美術、文芸、映像等の各種文化発表活動および普及活動(ワークショップ、レクチャー等)を共催します。
●一般市民が参加し、普及活動を行う展示会など。●公募キャストによる地域を題材とした映画制作など

ギャラリープログラム



1人の作家が2点まで、100〜200号の大作も多数出展。札幌だけでなく、北海道各地の人々が具象画を堪能しました。



これから美術に関わることを希望する若者に、「教科書とは違う実際の現場での美術の一面を感じてほしい」との想いから、全道の高校の美術部に無償で図録を送りました。

学校演劇の足跡からみた舞台づくり

だから面白いは

第1回

歴史で知る 北海道高校演劇の魅力

北海道の演劇において、欠かせない柱のひとつである学校演劇。

その足跡には先人たちの苦勞や熱い思いがあり、

深く知るほどに舞台づくりの楽しさや面白さが見えてきます。

初回は、北海道の高校演劇の歴史を振り返り、

高校演劇が持つ意義や魅力をご紹介します。

戦後間もなく始まった
高校演劇の全道大会

北海道で高校演劇の全道大会
が行われるようになったのは、戦後



札幌・石狩の高校生による
合同公演「銀河鉄道の夜」(昭和63年上演)



札幌北高校の「マタックカムシュベ」

8度の全国一に輝く 北海道高校演劇の実力

今年62年目を迎えた北海道高校演劇の全道大会は、毎年11月中旬に開催され、翌年8月に開かれる全国大会に出場する代表校1校を選出しています。北海道の高校が全国大会に毎年出場するようになったのは昭和41年から。「風土を確かめ、風土に根ざした、骨太な創作劇を作ろう」と、北海道を題材にしたオリジナル作品が数多く作られてきました。北海道高校演劇は全国的にも高い評価を受けてお

り、初出場したその年に代表校の札幌啓北商業定時制が全国一に輝き、以降も昭和51年、53年、55年、57年、60年、平成4年、21年と計8回、北海道の高校が全国一になっています。同じ地域の受賞回数としては全国有数の成績であり、ここから北海道高校演劇の実力の高さが見えてくると思います。

全国に影響を与えた 高校生の合同公演

全道大会が行われるようになって、北海道の高校演劇は飛躍的に発展を遂げました。しかし、一方でコンクールとしての弊害も牛じましました。競い合いのための秘密主義、勝った負けたというスポーツ並みの語句の氾濫、そして中には「優勝候補」と評判の高い相手校の小道具を故意に破壊するという事件まで起きてしまいました。そこで、このままではいけないとスタートしたのが合同公演です。演劇によって他校との関係を育み、共に舞台をつくる喜びを分かち合い、深い人間関係を築いていくこと。札幌地区と石狩地区では、大人数が登場する宮澤賢治の「銀河鉄道の夜」や、過去に3度しか公演されることがない大作「火山

間もない昭和26年のことです。記念すべき第1回大会の会場は、当時すすきのにあった映画館「新東宝劇場」。9地区の代表16校が参加し、総合賞には当時2年生だった鈴木喜三夫さん(北海道の演劇史研究者)が脚本を書いた札幌北高校の「ヌタツクカムシユベ」が輝いています。「敗戦と焼土の中、いち早く高校野球・甲子園大会が開かれ、球児が空腹をもとせずグラウンドを走り回っているとき、文化面でも情熱と闘魂を生徒たちから引き出してやること。総合性において演劇こそ第一で、これを全道に広げて、高校生による美しい文化の花を咲かせたい」。これは第1回大会開催時に、主催した北海道高校教職員組合(道高教組)の文化担当・宮崎衝氏が語ったメッセージです。後年の第6回大会では初代道高文連・演劇専門部部长(札幌琴似高校校長)の宮崎芳男氏も「高体連」と「高文連」は高校教育の車の両輪」という名言を残しており、北海道高校演劇は苦難の時代に人々に大きな活力を与え、その礎を築いていきました。

全国一に輝いた8作品



昭和41年
札幌啓北商業定時制の「オホーツクのわらすっこ」
(作:本山節彌)



昭和51年
北星女子高校の「はい、さいなら」
(作:橋本栄子)



昭和53年
札幌開成高校の「大きな木」
(作:本山節彌)



昭和55年
札幌藻岩高校の「明日は天気」
(作:菅村敬次郎)



昭和57年
札幌開成高校の「水仙月の四日」
(作:本山節彌)



昭和60年
札幌静修高校の「山月記異聞」
(原作:中島敦、脚本:森一生)



平成4年
札幌静修高校の「花いちもんめ」
(作:宮本研、脚本構成:森一生)



平成21年
帯広柏葉高校の「これからごらん」
(作:帯広柏葉高校演劇部)

灰地」を合同公演というスタイルで実現し、釧路地区でも「イルクーツク物語」「マクベス」といった単独校ではつくれない舞台を複数の学校の生徒が集まって上演しました。そうした学校の垣根を越えてひとつの舞台をつくりあげる合同公演は北海道が先駆けとなり、全国へ飛び火。今日ではさまざまな地域で行われるようになりました。こうして築かれていった北海道の高校演劇は、過去62年の間にさまざまなチャレンジが試みられ、時には画期的な演出や表現も生み出されてきました。次回からは、具体的な作品をご紹介しますが、舞台づくりのさらなる面白さに迫っていきます。

文・写真協力 森 一生

昭和42年に札幌静修高等学校演劇部の顧問に就任。以降、異年にわたって高校演劇の指導に尽力し、同校を2度の全国一に導く。北海道高等学校文化連盟(高文連)演劇部の事務局長も務め、北海道高校演劇のレベルを全国トップクラスまで引き上げた功績は高く評価されている。

地域で行われているユニークな活動の紹介を、寄稿文でお届けします。

まちの文化創造事業

北海道音楽 大行進の80年

北海道音楽大行進実行委員会実行委員長 野崎耕作



子どもたちが元気いっぱい演奏した「幼稚園・保育園の部」。



リベライン旭川パークから、息が合った演奏でスタートした参加者「小・中・高・一般」。

北海道二大名橋のひとつである旭橋の「リベライン旭川パーク」に、参加109団体、約4千名が集った平成24年6月9日(土)の開会式。この日は晴天に恵まれ、2万人余の観衆が集まり、中学・高校生900名による合同演奏が、西川旭川市長のタクトによるファンファーレ&行進曲「若い街から」でスタート。デモンストレーションでは、道警音楽隊と80回記念として特別招へいた石川県立小松工業高等学校マーチングバンドの演技に大喝采。パレードが行われる旭川市街中心部の沿道や平和通買物公園には、2時間以上も前から椅子や敷物を敷いて孫とおにぎりをほおぼりながら待つ観衆など15万人余り。

80回の節目にあたり、目玉となる企画をどうしようかとの話し合

いの末、全国的に実績のある小松工業高校を招へいすることとなった。さらには今回初めて台湾からの参加もあり、北海道文化財団の支援も受け、約6時間にわたって街中をいくつもの吹奏楽団が演奏するパレードで魅了してくれた。

薫風駆け抜ける6月、「あの音楽大行進を見ないと夏が来ない!」、「大行進を見に行く前に田植えを終わらせよう」など、この行事を楽しみにしている旭川市民は多く、初夏の風物詩として旭川市をはじめ、近郷近在の方々にも染みついてい

昭和4年6月5日に始まったこ

の行進は、創始者であるマチイ楽器店の店主・町井八郎氏、北海道タイムズの竹内支局長、北海道庁立旭川商業学校(現北海道旭川商業高等学校)の吉本氏らによって発案され

た。当時戦争で亡くなった方々を祭った招魂社のお祭りが例年6月5日に行われていて、発案した人たちはにぎわいのある招魂祭の日にやろうと考え、最初の名称は「慰霊大行進」であった。連続と続いたこのパレードは、昭和49年に純粋な音楽行進として「北海道音楽大行進」と名称を改め、昭和61年には一般の部に加え、「幼稚園・保育園の部」も併設された。私が参加した昭和40年代は暑気もよく、久留米市からブリヂストン、浜松市からヤマハなど、ビッグバンドが道内はもとより全国各地から参加した。

平成10年に北海道タイムスが廃刊となったため、翌年からは旭川市・吹奏楽連盟・北海道新聞などによる実行委員会が結成され、今日に至っている。第70回の平成14年から

は歴史の重みを考慮して開催日を変更。限りなく6月5日に近い週末に設定された。学校の参加団体が多いことから週5日制に運動させたわけである。全国各地でも音楽行進が行われているが、山車や踊りなどが組み込まれているものが多い。純粋に音楽大行進を80年もの長きにわたって行っているのは当地だけで、規模・歴史からも旭川が全国に誇れる催しであると思っ

ている。

アートのチカラ POWER OF ART

東日本大震災の被災地で行われている、文化芸術活動による支援事業にかかわる方から寄せられた“現在進行形”の声をお届けします。



福島県
福島市



児童センターの広場に
設置された線量計

6月28日、前日に出発した「チーム馬車馬」は、午前中に仙台港に入り、そのまま最初の公演場所である福島市東浜児童センターに到着。最初に目に飛び込んできたのは、外に

子どものための 劇場ができること

～福島支援人形劇応援公演～

札幌市こどもの劇場やまびこ座
館長

矢吹 英孝

設置された大きな丸い機械。そこには数値が表示されている。さらに外の遊具にはロープが巻かれ、「使用禁止」の貼り紙。我々は、いきなり福島への「今」を実感することとなる。

今年度、札幌市の2つの子どもための専用劇場「やまびこ座」と「こぐま座」では、赤い羽根「災害ボランティア・NPO活動サポート基金」の助成を受け、両劇場で活動する約40の人形劇団と協力し合いながら、福島県内への人形劇を通じた文化支援活動を行っている。

今回は、6月28日～7月3日の日程で福島市の保育所、幼稚園、児童センターなど15会場、16公演を実施した。札幌市内で活動する「チーム馬車馬」「人形劇団ばおば



ぶ」「人形劇団ボクラ&てぶくろ」の3劇団が各会場で公演し、延べ約1600人もの方々に観ていただくことができた。どの会場も早朝からの準備にもかかわらず快く受け入れてくれ、準備中には、窓にへばりつきながら人形劇を待っている子どもたちの姿がとても印象的だった。食い入るように人形劇を観て、身を乗り出しながら大声で人形に声援をおくる子どもたち。そして一緒に大笑いする大人たちの姿も見ることができた。

放射能による子どもたちの日常生活への影響はとて大きく、昨年は1度も外遊びができない状況であったという。今年の5月頃から少しずつ外遊びを始めたところがあ



とんどで、しかも1日30分程度という厳しい制限。1年ぶりの外遊びで「プラン」をこげない、走れない、すぐ転ぶという運動能力の低下は現場の先生にとって、とてもショックな現実であった。どの施設にも当たり前のように置いてある放射線量計や、使うことのできない遊具や砂場。行き場のない除染後の土の山。普通ではない生活が福島にはあった。

ある幼稚園の園長先生のお話です。「周りに住むおじいちゃん、おばあちゃんが震災以降、子どもたちの元気な声や笑い声が消えてしまい、おかげで私たちも元気がなくなりました……」。

人形劇には人を癒し、笑顔にする力がある。子どもたちの笑顔は、周りの大人たちも笑顔にし、生きる希望を与える。子どもたちの笑顔は未来への希望。今回の公演であらためて人形劇の力を感じることもでき、これからも福島のためにできることを続けていきたい。

先日、福島からたくさんのお礼のメッセージが届いた。その中に「どうか福島を忘れないでください」という切実な声も書かれていた……。



この街 この人

第20回



江差追分会上席師匠
青坂 満さん

“民謡の王様”江差追分と
共に生きる伝承者

200年以上にわたって唄い
継がれ、独特の音階と節回しの
難しさから、民謡の王様と称さ
れる「江差追分」。江差町のかも
め島で生まれた青坂満さん(81)
は、そんな追分節を子守唄のよ
うに聴いて育ちました。



約370年の歴史を誇
る、北海道最古の祭り「姥
神大神宮渡御祭」。毎年8
月9日〜11日、山車と
呼ばれる13台の曳き山が
神輿の行列に伴って町中
を練り歩き、豊かな海の
恵みへの感謝を表します。



山車人形の作り手
西海谷 望さん

父の遺志を受け継ぎ
伝統の山車人形を守る

人から人へ。一人から大勢へ。アート
の可能性は、人を通して無限に広が
っていきます。地域の文化を支えてい
るさまざまな方たちを通して、北海道
各地の文化を紹介します。

江差町

<http://www.hokkaido-esashi.jp/>

檜山振興局／檜山郡
面積…109.59km²
総人口…8,718人(2012年8月末現在)
人口密度…80人/km²
隣接自治体…乙部町、厚沢部町、上ノ国町
町の木…ヒノキアスナロ
町の花…ハマナス

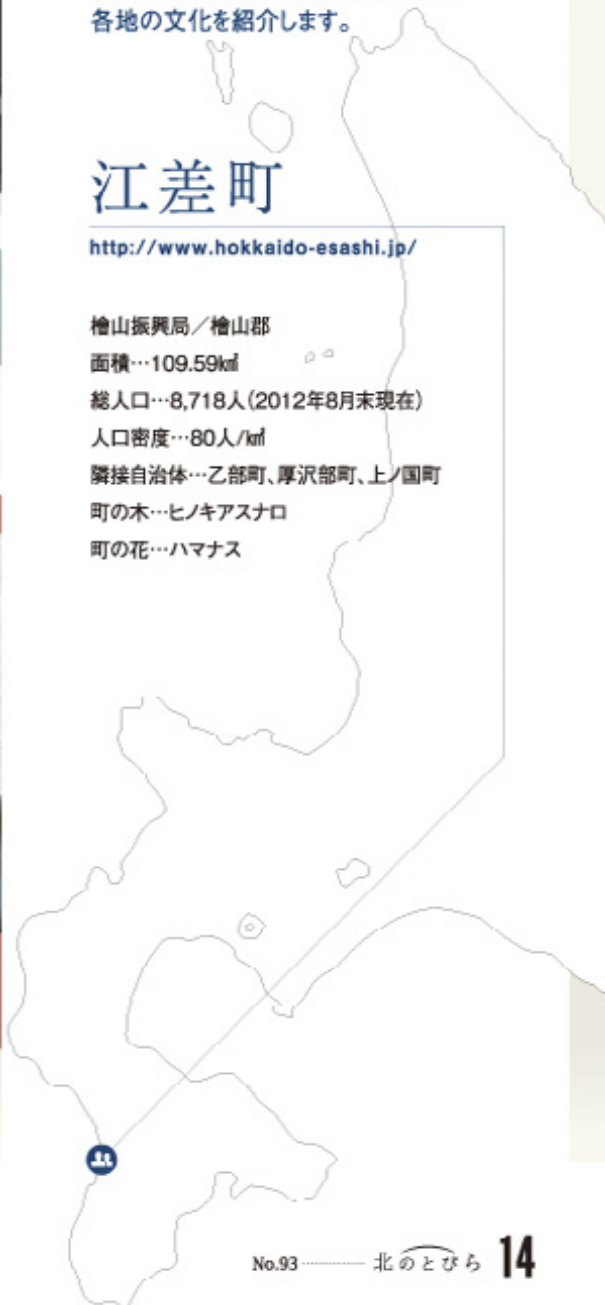
江差町の食育

バリツとひと口ほおばれば、
米のほのかな甘みと黒ゴマの香
ばしさが優しく広がる「こうれ
ん」。聞き慣れない響きですが、
江差町の農家では古くから作ら
れてきた伝統的な米菓子です。



新函館農業協同組合江差支店女性部 部長
長尾 和子さん

江差の農家に伝わる
郷土菓子を次世代へ



① 石田 久枝さん [郷土芸能踊り指導者]

長野県生まれ。結婚を機に江差へ。昭和50年代から江差三下り、江差追分踊りに参加。江差追分分館で実演を行うほか、江差追分踊り保存会の事務同代表として普及にも努める。小中学生の舞踊グループ「Hamanasu会」の指導も担当する。

② 瀬川 五百子さん [追分人形の作り手]

江差町生まれ。戦後、実母が江差追分踊りをモチーフに「追分人形」を考案、その制作を今に受け継ぐ。江差追分全国大会では優勝者の副賞に瀬川さんの「追分人形」が寄贈される。優美な舞い姿が魅力で、土産としても人気。

③ 鈴木 富子さん [江差陶石研究会 代表]

「江差陶石」と呼ばれる地元の粘土を使い、陶芸品を製造・販売する「江差陶石研究会」の代表。江差追分の一節を描いた湯呑みや小皿、ヒラメやイカなど海の幸をかたどった箸置きなど、江差ならではの作品を手がける。

④ 辻 希良さん [江差塗工房 代表]

平成9年、職人の技術を生かした新しい産業を興そうと、町内の塗装職人など7名で発足した職人グループ「江差塗工房」の代表。江差に数多く残る古材を活用し、新スタイルの塗塗りに挑んでいる。塗の植栽も始めた。

⑤ 松村 隆さん [文芸誌「江さし草」代表]

昭和51年に刊行した季刊文芸誌「江さし草」代表。俳句や短歌をはじめ、江差地方の風土・文化や郷土史、写真など幅広いジャンルの作品を収録してきた。発行号は通算143冊にのぼり、会員は現在約200名。

「漁師が唄う追分節を聴いて、身震いするほど感動しましたね。それからは、追分節が人生そのものです」とほほ笑みます。弱冠16歳で初代・近江八声氏に師事し、本格的な指導を受け、昭和43年には歴代6人目の江差追分日本一に輝きました。

現在は、江差追分分会の上席師匠として、町内にある「江差追分分館」の追分道場で、町民や観光客に追分節の指導を行うほか、全国の愛唱者を対象とした年2回のセミナーの講師を務めるなど、江差追分の普及と後進の育成に尽力しています。「追分節に刻まれた喜怒哀楽の心情、その時代の、色、を多くの人に伝えていきたいですね」。潮の匂いの青坂節として知られる名人の調べは、江差の宝として今後も受け継がれてゆくことでしょう。

▶ 江差追分分館

檜山郡江差町中歌町193-3

開館時間/9:00~17:00

休館日/無休(11~3月は月曜、祝翌日)

<http://www.hokkaido-esashi.jp/kankou/oiwakekaikan/top.htm>



全国各地から精鋭が集う江差追分全国大会は、今年50回目を迎えた(上)。江差追分の独特の節回しを指導する青坂さん(右)

最大の見どころは豪壮華麗な山車。西海谷望さん(56)は、その最上部に据えられる主役の人形づくりと修復を、親子二代で手がけてきました。看板制作が本業ですが、浅草で修業し人形師を志していた父にとつて、山車人形づくりはライフワークのようなものでした。そして、お父さんの他界後は、「人形は父が遺してくれた大切な宝物。この地域に受け継がれる祭りと共に、弟と力を合わせて守っていこう」と決意したのです。

平成16年には、初めて姥神大神宮渡御祭の山車人形に挑み、威風堂々たる伊達政宗公を見事に完成させます。「祭りは江差の暮らしの拠り所。その主役の製作に携われるのは、とても名誉で幸せなことだと実感しています」。今年も親子二代の人形が、江差の夏を勇壮に盛り上げました。

▶ (有)サインズ人形社

檜山郡江差町中歌町92



図案を描いた丸太にノミを入れ、頭部と顔の輪郭をコツコツ彫り上げる(上)。山車の中心に鎮座する西海谷さん作の伊達政宗公(右)

ました。「昔はこの家でも定番のおやつでしたが、減反政策の影響で、だんだん作る家庭が少なくなっています」。

そこで立ち上がったのが、長尾さんをはじめとした、農家の母さんたちでした。「大事な郷土の味を次世代に伝えなくては！」と、昭和57年、江差産の餅米を原料に「こうれん」の製造・販売をスタート。また、地域の人々や子どもたちに作り方を知ってもらおうと、町内の小学校などへ出前講座も行っています。長尾さんは、「子どもたちが『こうれんは江差のおやつ』と認識してくれるようになったことが、何よりうれしいの」と嬉しく語ります。その優しい笑顔には、農家の母さんの誇りがしっかりと表れていました。

▶ 新函館農業協同組合江差支店

檜山郡江差町水堀町51

*「追分こうれん」は、道の駅 江差、アンテナショップ「ぶらっと江差」などで販売



こうれん作りは毎年6月。1袋分の米を使い、すべて手作業で行う(上)。江差土産に人気の「追分こうれん」は10枚入りで735円(右)



アートゼミク012

柳木 雅寛
ダンスワークショップ

国内外で活躍するダンサーで振付家の柳本雅寛氏による、コンテンポラリーダンスの作品制作ワークショップを開催します。最終日にはショーイングも予定しています。

- 日程 10月29日(月)～11月4日(日)
- 会場 琴似/ホス
- 参加料 無料

[主催・お問合せ先]
公益財団法人北海道文化財団
Tel.011-272-0501

*応募資格、応募方法などの詳細は、当財団ホームページ(<http://www.haf.jp/>)をご覧ください。



韓国演劇協会光州広域市支会
北海道文化財団交流事業

劇団オル・アリ(극단 얼·아리)
「その男の事情」(그 남자의 사정)

作/演出 ヤン・テフン
出演 チョンスンギ、チョンギョンア
チョンテソク、キムギョンスク

- 日程 10月27日(土)19:00開演
28日(日)14:00開演
- 会場 生活支援型文化施設コンカリーニョ
- 入場料 前売1,000円/当日1,500円
- <チケット取り扱い>
ローソンチケット(Lコード12846) Tel.0570-084-001
大丸プレイガイド Tel.011-221-3900
- [主催・お問合せ先]
公益財団法人北海道文化財団
Tel.011-272-0501

若手芸術家発表事業

当財団が推薦する若手演奏家(HAFアーティスト)が、道内各地域でコンサートやアウトリーチ活動を行います。

トリオアンジュエ

小林 佳奈 (ヴァイオリン)
長谷川 加奈 (ヴァイオリン)
谷敷 さなえ (ピアノ)

喜茂別町

コンサート 10月22日(月)16:00開演 喜茂別中学校
アウトリーチ 10月23日(火)喜茂別中学校音楽室
(※同校生徒対象)
お問合せ先 喜茂別町教育委員会 Tel.0136-33-2203

福島町

コンサート 11月11日(日)16:00開演 福島町福祉センター
アウトリーチ 11月12日(月)福島中学校(※同校生徒対象)
お問合せ先 福島町教育委員会 Tel.0139-47-3675

興部町

コンサート 11月18日(日)17:00開演 興部町総合センター
アウトリーチ 11月19日(月)興部町福祉保健総合センター
(※同センター入居者対象)
お問合せ先 オホーツク・おこっぺ芸術劇場実行委員会
Tel.0158-82-2552

能登谷 安紀子

(ヴァイオリン)

ニセコ町

アウトリーチ 11月2日(金)ニセコ町民センター
(※本人講演「女大生」受講者対象)
コンサート 11月3日(土)14:30開演予定
有島記念館アートホール
お問合せ先 有島記念館 Tel.0136-44-3245

ご用意しているのは、心地よい時間
庭園という名のホテルでお逢いしましょう。

ご宿泊
ご宴会
ご会合
ご婚礼

RESTAURANT

スピカ

四川飯店

地下レストラン

【味の会】

ホテル札幌カーテンパレス 〒060-0001
札幌市中央区北1条西6丁目(道庁南側)
TEL(011)261-5311 FAX(011)251-2938 URL <http://www.hotelgp-sapporo.com/>

愛をとおして真理へ

天使大学

看護栄養学部/看護学科・栄養学科
大学院/看護栄養学研究所

[看護学専攻]ホスピス・緩和ケア看護学コース/公衆衛生看護学コース/精神看護学コース
[栄養管理学専攻]博士前期課程/博士後期課程

助産研究科
[助産専攻]助産基礎分野/助産教育分野

〒065-0013 北海道札幌市東区北13条東3丁目1-30 tel.011-741-1051(代) <http://www.tenshi.ac.jp>